

世界観認識を問い、『注文の多い料理店』の〈価値〉を切り拓く読みの展望

—「わたくし」と「あなた」／〈語り手〉のまなざしと「視点人物」のまなざしを
〈言語以後〉と〈言語以前〉という原理を踏まえて立体的に問題化すること—

甲州市立松里小学校 黒瀬 貴広

1. はじめに—童話集『注文の多い料理店』の「序」をめぐる—

童話集『注文の多い料理店』は、9つの作品が並べられ、その初めには全体を包み込む「序」が記されています。以下、その全文を掲載します⁽¹⁾。

わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道路線やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとおり書いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

ここでは、「氷砂糖」に象徴される「物質」としての食べ物と「すきとおったほんとうのたべもの」という二種類の食べ物が峻別されています。前者は、人類が直接目で見て、手に触れることができることを前提とし、リアリズムの枠組みの中にあります。一方、後者は「林や野原や鉄道路線やらで、虹や月あかりからもらってきた」ものであり、知覚を超えたものとして問題にされています。賢治は、人類が目で見えて捉えることのでき、「客観的現実」を真実とするリアリズムの枠組みを超えて、大自然から受け取ったこの「すきとおったほんとうのたべもの」を「あなた」＝読み手に届けようとしているのです。「わたくし」が「あなた」に問いかけている問題はこうした世界観認識に関わる問題として受け止め直すことが希求されています。

本稿では、「注文の多い料理店」の作品研究及び授業実践をめぐって、この「すきとおったほんとうのたべもの」の領域を問題化していきます。その過程の中では、「物質」としての食べ物の領域、リアリズムの世界観との葛藤が、顕わになっていきます。二つの世界観認識をめぐることが作品研究や実践研究の中で直接的に問われ、「すきとおったほんとうのたべもの」の領域が掘り起こされていく、これが本稿を貫く問題意識です。

2. 近代小説が追究する世界観認識の問題―宮沢賢治／三島由紀夫／田中実―

ところで、賢治が向かっていった上記の世界観認識の問題は、近代小説（小説童話）が本質的に追究している問題とそのまま重なっています。例えば、三島由紀夫が晩年に記した「小説とは何か」では、「客観的現実」という枠組みとその〈外部〉をめぐることが直接的に言及がなされています⁽²⁾。三島は、柳田邦男『遠野物語』の第二十二節を読み、「ここに小説があった」と「三嘆」したことを記しています。この『遠野物語』の第二十二節では、曾祖母の通夜の晩、親族一同が集まる座敷にその曾祖母の幽霊が現れるという小話が語られています。三島は「棺内に動かぬ屍体があるという事実と、裏口から同一人が入って来たという事実とは、完全に矛盾する」とし、「二種の相容れぬ現実が併存するわけではないから、一方が現実であれば、他方は超現実あるいは非現実でなければならない」と通常は考えるとしています。ところが、三島は「「袖にて炭取にさはりしに、丸き炭取なればくるゝとまはりたり」と来ると、もういけない」、「亡霊の出現の段階では、現実と非現実が併存している。しかし炭取の廻転によって、超現実が現実を犯し、幻覚と考える可能性は根絶され、ここに認識世界は逆転して、幽霊の方が「現実」になってしまった」としたうえで次のように説きます。

その原因はあくまでも炭取の廻転にある。炭取が「くるゝ」と廻らなければ、こんなことにはならなかったのだ。炭取はいわば現実の転位の蝶番のようなもので、この蝶番がなければ、われわれはせいぜい「現実と超現実の併存状態」までしか到達することができない。それから先へもう一步進むには、（この一步こそ本質的なものであるが）、どうしても炭取が廻らなければならないのである。しかもこの効果が、一にかかって「言葉」に在る、とは、愕くべきことである。

三島は、「炭取はいわば現実の転位の蝶番」だとし、「この蝶番がなければ、われわれはせいぜい「現実と超現実の併存状態」までしか到達することができない」と述べています。それは、三島が「現実」と「非現実」の併存ではなく、幽霊によって炭取が廻転するという物理法則に反する領域にこそ小説があることを問題にしているからです。三島は「現実と超現実の併存状態」を含めて一つの〈現実〉とし、これを人類が作り出した虚構と捉えます。そして、この人類が作り出す虚構としての〈現実〉とその〈外部〉との間に「蝶番」を付ける世界観認識を提示しているのです。

この「小説とは何か」で三島が問題にしていることは、賢治の世界観認識とそのまま通

底しています。三島は、「現実と超現実の併存状態」としての〈現実〉とその〈外部〉との間に「蝶番」を付けます。一方、賢治もリアリズムの〈外部〉の「大自然」から受け取った「すきとおったほんとうのたべもの」を読み手に届けようとし、両者は、「客観的現実」を真実とするリアリズムの枠組みを踏まえながら、その〈外部〉の問題を追求していたのです。

こうした近代小説の作家たちが追求してきた世界観認識に関わる問題を「近代小説の《神髓》」の問題として受け止めている一人に、文学研究者の田中実がいます。田中は、「近代的リアリズムを追求し、その極致に向かうのが近代小説の〈本流〉だとすれば、鷗外や漱石らはそのリアリズムの極致を原理的に対象化し、その外側に立って、近代（モダン）の制度や思考の枠組みを超えるところにその《神髓》を見ます」と提起しています(3)。そして、「リアリズムを本流にした近代小説の中でも近代小説の《神髓》と呼べる作品群を読み解くには、リアリズムを踏まえながら、同時にそれを対象化してその外部に立つことが基本と考えています。それには〈語り手〉が自身の語る視点人物のまなざしをどう相対化して語っているのか、これを捉えることが鍵です」と小説の読みの原理論について言及しています(4)。田中は「客体の外界の対象である世界の出来事や事物は常に誰かの主体によって捉えられた外界の現象でしかなく、客体の対象そのものではありません」とします(5)。そのうえで、「鷗外『舞姫』から始まる〈近代小説〉の〈本流〉ならぬ《神髓》を読み込むためには、主客相関の外部、〈第三項〉の措定を要し、世界とは何かと問う、世界観認識の問題を必要」とすると述べるのです(6)。

賢治や三島、田中が問題にしているのは主体が捉えた対象の〈外部〉を問う世界観認識です。そこでは、「客観的現実」(＝事実)を前提とする思考の制度を超えて、主体に現れた現実とは何か(＝本質)が問われています。「注文の多い料理店」の読みの実践は、この近代小説の《神髓》という問題を抱え込んでいくことが求められているのです。

3. これまでの「注文の多い料理店」の読み

ここで、上記の世界観認識の問題を踏まえつつ、「注文の多い料理店」の読みの研究史を相対化していきます。これまで「注文の多い料理店」は、その多くが、「物質」的な豊かさを追求してきた「近代」に対する批判や警告という文脈の中で読まれてきました。例えば、恩田は「〈自然〉に対して勝手な注文を出して破壊してきた〈人間〉が、逆に〈自然(山猫)〉から注文されているという風刺」として作品の主題を捉えています(7)。また、秋枝は、紳士を「消費者」、山猫を「生産者」という観点から捉え直したうえで、「この料理店の中において、多くの扉に書かれた言葉を解釈しながら、料理店の奥に入り込んでいく紳士の行動が、パソコンから特定のサイトのページにアクセスし、クリックしながらその世界に入り込んでいくネット社会のコミュニケーションと重なる」ことを指摘しています(8)。そして、「相手の正体が見えない中で与えられた言葉の意味を読み取る時、人は言葉を発している側が何を考えているかを想像するのではなく、自分の事情、特に欲望を充足させるような意味を見出してしまう」とし、この「現代社会を動かすシステム」を秋枝は批判しています。

両氏は「物質」的な豊かさを追求する近代の産物としての二人の紳士たちを批判的に捉えている点で共通しています。しかし、この両氏の指摘では、童話集の「序」における「すきとおったほんとうのたべもの」の領域の問題が問われていません。すなわち、リアリズムを超えた「大自然」とは何かという問題です。両氏は「客観的現実」を前提とした文明の内部において文明を批判していますが、問題の急所は、その文明の〈外部〉領域を問うことにあります。人間共同体の〈外部〉を措定し、その向こう側からリアリズムの枠組みを囲い込み、相対化していく志向性です。

こうしたことは、文芸教育を牽引して来た西郷に対しても同様の指摘ができます。西郷は、「注文の多い料理店」は、多くの論者が主張するように、〈山猫〉の煩惱が生み出したものであるといえましょう。しかし同時に、〈二人の紳士〉の煩惱が生み出したものでもあるのです。まさにその意味でも「二相系」の料理店なのです」と述べています⁽⁹⁾。また、「この世界は、現実でもあり、非現実（幻想）でもあるという世界です。料理店自身が「現実と幻想の二相」的存在、「現幻二相」的存在」であるとしたうえで次のように論じています。

ところで、死んだはずの犬がなぜ生き返ったのでしょうか。このことはどう考えてもわかりません。作者がこの童話集の「序文」に述べているように、「作者にもわからないこと」なののでしょうか。でも、この面妖な西洋料理店の出現に先立ち、白熊のような二匹の犬は山猫にとっては好ましくない邪魔者として「始末」しただけのことであるかも知れません。従って山猫の呪術が破けると同時に「蘇生」したとも考えられます。「どうしてもそんなことがありそうに思えて」くる世界といえましょう。まさしく「現幻二相」、「夢現二相」の世界です。

ここで西郷が述べている「現幻二相」とは、三島の言葉で言えば「現実と超現実の併存状態」としての〈現実〉という枠組みの中にあります。「炭取の廻転」という事態を引き受けるならば、紳士と山猫が作り出すこの共同幻想の外部領域が問われる必要があります。これは、恩田や秋枝も同様です。三者は〈言語以後〉という枠組みの中で、文明の批判へと向かっています。一方、賢治や三島、田中が問題にしているのは〈言語以後〉／〈言語以前〉としての《二相》です。哲学者大森荘蔵は「我々の住む世界は言語以前に存在し、言語はこの世界の様々を表現する記号系である、という通念を改めなければならない。世界は言語と独立に存在するものではない。世界の事物や状態がかくかくであることは言語によってそうなるのである。もちろん言語が世界を無から創造産出したなどというのは荒唐無稽である。しかし、言語が世界のあり様を制作するのだ、とまでは言ってよいのではあるまいか。／そして言語は人間の生活の中で造られ、人間の文化の中で伝えられる。その言語が世界のあり様を制作する、というのは、この無機的世界に人間的な意味を与えることである」と述べています⁽¹⁰⁾。ここで大森が提起している「無機的世界」が〈言語以前〉の領域です。人類は言語で世界を捉え、〈言語以後〉に生きながら、その〈向こう〉に〈言語以前〉の問題を内包させています。

賢治や三島、田中は、この〈言語以後〉を超えた〈言語以前〉を問う志向性を共有しています。三島ならば「現実と超現実の併存状態」とその〈外部〉との間に「蝶番」を付けることとして、田中ならば主客相関の〈外部〉としての〈第三項〉という読みの原理論として、そして賢治ならばリアリズムを超えた「すきとおったほんとうのたべもの」として、です。近代小説の《神髓》に向かって読むということは〈言語以後〉としてのリアリズムを超えた〈言語以前〉の問題を引き受けることとして実現していくのであり、この世界観認識の問題が「注文の多い料理店」の読みでも問われています。

4. 「注文の多い料理店」の読みを問う

「注文の多い料理店」における「すきとおったほんとうのたべもの」＝〈言語以前〉＝〈第三項〉＝〈外部〉の領域を問うこと。このことの根源に迫るためには、視点人物のまなざしに入って出来事を読むだけではなく、そうした出来事を語っている〈語り手〉のまなざしを同時に問題化し、語り一語られる相関として読むことが求められると考えます。これは、先に取り上げた田中の読みの原理論を踏まえています。例えば、〈語り手〉は紳士たちの姿について「すっかり」イギリスの兵隊の格好をしていると語っています。ここでは、〈語り手〉が紳士たちの格好を狩猟にそぐわないものとして批評しています。一方、「専門の鉄砲打ち」について、〈語り手〉はその格好について全く触れていません。これは、「鉄砲打ち」の姿が狩猟において至極全うなものだったからです。これが、「専門の」という修飾語が付されている所以です。こうした事態は視点人物の紳士に見えている世界を読むだけでは、見えてきません。視点人物のまなざしに入って出来事を捉えると同時に、その視点人物のまなざしを超えた〈語り手〉のまなざしとの相関関係で読むことで、読み手が捉えている対象世界もまた〈外部〉との関係で相対化されていくのです。これは、死んだ犬が生きて戻って来るという事態とは一体どのようなことなのかを問題にする時も同様です。西郷の場合、「幻想」や「呪術」といった枠組みで犬の生と死を意味付けしますが、これは「現実と超現実の併存状態」に留まります。「炭取の廻転」という事態として受け止め直し、リアリズムの枠組みを超えた「大自然」を問うことが希求されているのです。そのことの実践を、本稿では田中の読みの原理論を踏まえ、視点人物のまなざしを超えた〈語り手〉のまなざしを問うこととして展開していきます。「わたくし」／「あなた」、「視点人物のまなざし」／〈語り手〉のまなざしを、〈言語以後〉／〈言語以前〉という世界観認識を踏まえて立体的に問題化することで、リアリズムの枠組みを超えた「すきとおったほんとうのたべもの」としての「大自然」を問うていきます。これが「注文の多い料理店」の授業実践に向けた作品研究の根幹になっていきます。

「注文の多い料理店」の〈語り手〉は、「だいぶの山奥」と「山奥」という二つの空間を語り出しています。「だいぶの山奥」とは、鳥や獣が一匹もない場所、山猫が生息する空間です。これまでの『注文の多い料理店』の研究史では、紳士を文明の象徴、山猫を自然の象徴として捉えられてきました。しかし、山猫は巧妙な手口で紳士たちをだまし、自らの手を汚さず獲物を得ようとします。このような山猫の在り方は、自らの手で生き物を殺すことがない貨幣経済の中で生きてきた紳士たちの在り方とほとんど相似形にあると言

えます。そして、紳士たちは自身の欲望に合わせて扉の言葉を解釈し、山猫も紳士たちの欲望をかき立てるようにして、扉の言葉を出現させています。「だいぶの山奥」とは、貨幣経済の枠組みの中に生きる紳士と山猫の双方の欲望がむき出しとなる空間だったのです。

一方、〈語り手〉はこれらの紳士と山猫が存在する「だいぶの山奥」を超えた、「山奥」の空間を語り出しています。ここは、「専門の鉄砲打ち」や「犬」が生きる空間です。視点人物の紳士が「痛快」さのために生き物を殺すのに対し、「専門の鉄砲打ち」は生き物を殺すことによって自己の生を成り立たせている存在です。「相手を殺すことで自分が生きる、自分を殺すことで相手が生きる」という命の交換を抱え込んだ場が「山奥」です。このようにして〈語り手〉が語り出す二つの空間を掘り起こすと、「犬」が突然死んでしまうことの意味もまた見えてきます。「だいぶの山奥」は、鳥や獣が一匹もいない、貨幣経済を枠組みとした空間です。したがって、生と死の交換の場で生きる「専門の鉄砲打ち」はこの「だいぶの山奥」の空間に現れることはありません。これと同様、「犬」も「だいぶの山奥」に入ると突然死んでしまいます。〈語り手〉は、紳士と山猫が存在する「だいぶの山奥」と生き物本来の命のやり取りが行われる「山奥」という二つの空間を峻別しながら語っています。

しかし、紳士たちのもとに「犬」が生きて戻ってきたのは、自分たちが食べる側の立場から食べられる側の立場に〈語り手〉によって追い込まれたからだと考えます。田中は、「二人の若い紳士」はこの貨幣によって固有の人間性をその意識の表層で剥奪された傀儡、貨幣経済の都市の産物です。自身の無意識の場、山猫との「対幻想」の場で、彼らがこれまでとは逆に相手から楽しまれながら殺される立場に立ったことによって、初めて自分たち生き物の生の在り方を全身で体得させられたのです。ここに至って、「二人の若い紳士」は「だいぶの山奥」の奥、言わば無意識領域のその外部と出会うことになります。この外部、〈向こう〉なる時空は「専門の鉄砲打ち」や「白熊のやうな犬」の生きている「山奥」、ここは彼らが獲物と死闘する、生と死の交換の場、それを大自然・大宇宙が包摂しています。鳥や獣を楽しみで殺して来た二人が今度は自分たちが食べられる側に立つことで、この「自然」の宿命、生命の原理・原則の場に初めて直面した、そのときの恐怖が「紙くづのやう」な顔です。そこに、彼ら二人の意識の底の無意識のその外部、大自然・大宇宙から光が射し、その「紙くづのやう」なくしゃくしゃの顔のまま救い上げられるのです。」（筆者注：太字原文ママ）と述べています⁽¹¹⁾。ここで重要なのは、貨幣経済＝「だいぶの山奥」における紳士たちと、それまでの主体が壊され〈外部〉＝「山奥」に包摂されている紳士という《二相》を語る〈語り手〉を問題化する過程で、意識・無意識領域（＝リアリズム）を超えた〈外部〉とは如何なる領域なのかが問われている点です。そして、そのことが「紙くづ」の顔の紳士たちが救われるというパラドックスの問題として現れてきます。

紳士たちは自らが「食べられる」立場になったことで、「貨幣の交換」を超えたところで、「生と死」の極限的なやり取りが起きていることを「食べられる側」として体験することになりました。また、紳士たちは、これまで自分自身が生きるために相手を殺してきたことを、身をもって体感したはずですが、それは、それまでの貨幣によって支えられてきた自分たちの根拠が全て瓦解・倒壊し、自分を自分とする根拠、アイデンティティも根源か

ら崩壊させられたことを意味します。そのことが「泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました」、さらには「紙くずのようになったふたりの顔」の内実です。紳士たちは自身の無意識領域を含めたどこを探っても救いようのないところまで追い込まれたのです。しかし、ここまで追い込まれた時、〈語り手〉は「犬」や「専門の猟師」が生きる「山奥」という場に紳士たちを救い上げます。「山奥」とは、生き物が殺し殺される関係性の中で一つの循環を生み出している、生と死の交換の場です。紳士は東京に帰ってこれからも生活が続けます。その意味では、「相手を殺すことで自分が生きる」主体としてこれからもあり続けます。しかし、紳士たちは同時に「自分が殺されることで相手が生きる」という主体＝「紙くず」の顔を持って生き続けていきます。この意味において、紳士と「山奥」は同じ生の循環の在り方を響かせていくことになります。すなわち、「相手を殺すことで自分が生きる」／「自分が殺されることで相手が生きる」という主体を同時に生きる紳士と、生と死の交換によって一つの循環を生み出す「山奥」が一つになっていくのです。このことによって「すきとおったほんとうのたべもの」が読み手の中で問題になっていきます。「わたくし」が「あなた」に届けようとする「すきとおったほんとうのたべもの」とは、「だいぶの山奥」を超えた「山奥」と、「紙くずの顔」としての紳士が一つになっていく問題として問われていくのです。

5. 単元目標と授業構想―初読の感想文を踏まえたうえでの問題意識と授業デザイン―

ここまで述べて来た作品研究は、授業実践で子どもたちの考えや疑問を価値づけ、展開していくうえで決定的に重要な意味を持ちます。作品研究の中では、授業者自身が視点人物である紳士のまなざしを超えた〈語り手〉のまなざしを問題化することで「注文の多い料理店」の読むことの〈価値〉を問うてきました。一方、授業実践の中では、今度は子どもたちも〈語り手〉のまなざしを問うことになります。授業者はこの子どもの読みの過程に対して絶えず指差しをしながら伴走することになります。しかし、同時に、授業者は子どもたちの言動を自らの枠組みに回収して理解するのではなく、絶えずその発言や記述の意味を問い続けていくことが要請されることになります。授業者が自らのまなざしを実践の中で絶えず相対化していくことが、リアリズムの枠組みを超えた「すきとおったほんとうのたべもの」を問題にしていく構えとして必須なものになるからです。こうしたことを踏まえる時、授業実践では、授業者と子どもの双方において、視点人物のまなざしを超えた〈語り手〉のまなざしを問うことが重要な意味を持つことが見えてきます。特に、授業者は、「①作品の読みにおける〈語り手〉のまなざし」はもちろん、「②教室で起きる出来事を俯瞰的に相対化する観点としての〈語り手〉のまなざし」を同時に問題化する必要があります。こうした構えを原理的に踏まえ、筆者は小学校4年生14名を対象に全7時間の授業を行いました（2024年7月）。まず、授業者は「注文の多い料理店」の作品研究を踏まえたうえで、以下のような単元の目標を設定しています。

単元目標

(1)「知識・技能」

○「語り手」が比喻や反復などの表現を使うことで登場人物をどのように批評しているか考える。

(2)「思考力・判断力・表現力等」

A「山奥」と「だいぶの山奥」を語り分けている「語り手」を捉える。

B「紙くず」のような顔になった紳士の顔の意味について考える。

(3)「学びに向かう力・人間性等」

○「紙くず」のような「顔」になった紳士たちの生を自分たちの生き方の問題として問い直す。

本単元目標では、「だいぶの山奥」と「山奥」を語り出す〈語り手〉のまなざしを問題化することを中心に据えています。子どもたちの読みは、基本的に初読の時点では、視点人物紳士のまなざしに拘束されながら作品世界を捉えていきます。しかし、繰り返しになりますが、視点人物のまなざしを介在させて出来事を捉えると同時に、〈語り手〉のまなざしからその出来事を相対化していくことが読みの急所となっています。子どもたちの初読の感想文としては例えば以下のようなものが出されていますが、上述した読みの原理を踏まえてその意味を問うていく過程を授業実践でデザインしていく必要があります（本稿では、個々の子どもたちの変化を見取ることができるように、C1、C2、C3…と表記しています。本稿ではこの表記方法を統一させており、同一記号の場合、同じ児童の発言や記述を示しています。ただし不特定多数の児童の行動・発言は単に「C」とのみ表記します）。

C1	なぜ最後の顔はなおらなかったんだろう。注文の多い料理店だったけどメニューの中身はふつうではない悪魔まほうのような物だと感じた。注文の多い料理店に行った人はいるのか？行った人はどうなってしまったのか。
C2	なんで店の話じゃないのに、注文の多い料理店っていうだいたいめいなのか気になるし、へいたいとか色々な話がまざっている。犬が死んで生き返るのはぜったいにおかしい。
C3	18 ページの「つぼの中のクリームを顔や手や足にすっかりぬってください。」というすっかりという表げんがどくとくだった。すっかりが多い。
C4	とちゅうでかおがしわくちゃになっちゃたのがなぜなのかギモン。いみがわからない。たべられるとおもいきやたべられなかった

まず、一読して見えてくるのは、子どもたちが「紙くずの顔」や「犬が死んで生きて返ってくる」ことの「分からなさ」に立ち止まっていることです。子どもたちの疑問は視点人物のまなざしに入りながら作品の「分からなさ」を問題にしていると言えます。しかし、一方で子どもたちは、視点人物のまなざしを超えた〈語り手〉のまなざしの

問題にも触れています。例えば、C3は、「すっかり」という表現が多数使われていることを発見しています。「「すっかりイギリスの兵隊のかたち」や山猫の「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください」という語り方に共通性を見出し、そこから読みを構築しようとしているのです。このように、子どもたちは作品の「分からなさ」と正対しつつ、〈語り手〉のまなざしに誘われながら読むことに向かっています。こうした子どもの疑問や発見を取り上げながら、「すきとおったほんとうのたべもの」の問題が問われていく授業を構想しました。単元の流れ（全7時間）は以下の通りとなります。

- | |
|---|
| 1：「注文の多い料理店」の読み、初読の感想文を書く。 |
| 2：感想を共有し、問いを立てる。 |
| 3：紳士がどのように語られているか考える。 |
| 4：紳士と山猫がそれぞれどのような人物として語られているか考える。 |
| 5：「だいぶの山奥」と「山奥」の語り分けについて考える。 |
| 6：「だいぶの山奥」と「山奥」の語り分けを踏まえて、紳士たちの「紙くず」の顔の意味について考える。 |
| 7：読後の感想文を書く。 |

では、具体的に授業実践の中で、どのようにして〈語り手〉のまなざしを問題化していくのか。また、授業で生起する出来事を如何にして授業者は相対化していくのか。その過程を実際の授業記録を参照し、省察する中で論じていくことを試みます。

6. 授業の実際

ここでは、第6時「「だいぶの山奥」と「山奥」の語り分けを踏まえて、紳士たちの「紙くず」の顔の意味について考える」の授業記録を中心に上げます。

時間	主体	発話・行動等の記録
	教師	(C5のノートをテレビ画面に表示する。)
	教師	はい。このノート誰だ。
	C	C5さん。
	教師	これ、まずC5さんの書いているノートから紹介したいんだけど、これC5さんどういうことか、ちょっとみんなに説明してもらって良い？
	教師	みんな、C5さんどういうことか後で聞くね。
	C5	私は紳士と山猫だったらどっちもどっちだと思った。だって、まだこのお話の中では紳士は動物を殺していない。

	教師	ストップ。今紳士は動物を何と言っていた？
	C	殺していない。
	教師	紳士は動物を殺していないんだね。続きをどうぞ。
	C5	けど山猫もギリギリ紳士を殺せなかった。だからどっちもこのお話の中では殺していないから、どっちも悪いとも言えないし、良いとも言えない。
	教師	紳士も生き物を殺していないと言っていたけど
	C 2	でも、山猫は殺したよ。
	教師	山猫は殺せたんだっけ？
	C 2	あ、違う。紳士を食ったんだよ。
	教師	食えたんだっけ？
	C	食っていない。
	教師	ここ大事なところだね。C 2 さんちょっと探してみて。
	C	(作品から手がかりを探す。)
	C 2	でも、紙くずみたいになったんでしょ。
	教師	その通り。C2 さんが言う通り、紙くずみたいな顔になったんだよね。
	C5	顔がぼろぼろになっている。
	C11	こわっ。
	教師	みんなこの顔怖いって言ったじゃん？
	C 13	先生。紙くずの顔について詳しく説明しているのは 23 ページだよ。
	教師	どこ？読んでみて。ちょっと聞いて。
	C 13	23 ページに「二人はあんまり心をいためたために、顔がまるでくしゃくしゃな紙屑のようになり、お互いに顔を見せ合い、ぶるぶるとふるえ、声もなく泣きました。」
	教師	あんまり、心をいためたために。どうぞ C 2 さん。
	C 2	今、C 13 さんが言ったところどこか分かったわ。
	教師	分かった？何ページだった？
	C 2	23 ページの後ろから 3 行目。
	教師	ページ 23 ページに載っているんだね。
	教師	で、紙くずのような顔。ちょっと戻るね。C 5 さんが言ってくれたように、紳士は生き物を殺して…。
	C	ない。
	教師	殺せなかったんだね。山猫も生き物を最後楽しんで殺そうとしたけど、紳士も結局殺せ…
	C	ない。
	教師	なかったんだよね。どっちも生き物を殺せなかったん

		だよ。ということだ。でも、C 5 さんはこのお話の中で生き物を殺して生きている人物がいることに気がついたんだよね。誰だと思う？
	C 4	専門の鉄砲打ち！
	教師	え、C 4 さん。C 4 さんと同じ考えだよって人いる？なぜ？みんなC 4 さんの気持ちを想像してみよう。なぜ専門の鉄砲打ちは生き物を殺して生きていると言えるんだ？じゃあ、まずC 9 さんどうぞ。
	C 9	鉄砲打ちは狩りをする人。
	教師	鉄砲打ちは何をする人って言っていた？
	C	狩りをする人。
	C 4	でもそれは良い意味で狩りをする人。
	C	(口々につぶやく。)
	教師	C10 さんどうぞ。
	C10	なんか。熊とかがいたら命懸けで生き物を殺して生きている人。
	C11	命懸け…。
	教師	命懸けで生き物を殺している人たちってこと？
	C10	うん。
	C9	殺して生きている人たち。
	C 1	先生。言っちゃああれかもしれないんだけどさあ。S 君 (C 1 の友人) のお父さんみたいな人だね。
	教師	それってC 1 さんどういうこと？
	C 8	え、それって言っているのかな。
	C 1	S 君のお父さんって狩りに行ったんだけど、亡くなっちゃったからさあ…。
	教師	覚えている？
	C 2	覚えているよ。俺そのこと書いたよ。
	教師	書いたよね。彼のお父さんみたいに…。これC 2 さんみんなみもう一回お話してもらってもよい？そのお話のストーリーをもう一回みんなにお話をしてもらって良い？知らない人もいるから。
5:00	C11	おれ知らない。
	C 2	えっとー、S 君のお父さんは、なんか、銃の、熊とか色んな悪い動物を狩りにいく仕事をしていて、それで、狩りに行くって聞いたから「行ってらっしゃい」って言ったら、それで行ったら、なんか山の奥で遺体、骨だけ残されて死んでたっていうのを聞いて…。
		(4 秒の沈黙)
	教師	っていう話があったんだって。

	C	怖い。
	教師	うん。怖いよね。
	C 7	悲しい。
	教師	このお話ってさあ、つまり、紳士は生き物を殺していない。殺せない。あ、これ正確に言うと殺せないだね。
	C 2	要は、紳士と S 君のお父さんは同じだね。
	C10	だけど紳士は楽しんで殺していたよ。
	教師	こっち（板書の紳士と山猫を指し示して）は楽しんで殺していたんだよね。でもこっち（専門の鉄砲打ちを指し示して）の人物たち、専門の鉄砲打ちは楽しんで殺している？
	C13	違う。「専門」
	教師	「専門」だもんね。ああ。
	C7	ありがたく。
	教師	ああ、専門だからかあ。すごすぎる。専門ってことだから。楽しんでいるわけじゃないんだな。
	C13	やらなければならない。
	C	（口々につぶやく）
	教師	さあ、ここまでいいよね。次の人を紹介するね。
	C 1	でも紳士だって最後に命をかけてやっているけど、動物だって命を懸けて・・・。
	教師	それに関わると思う。見てね。
	教師	（C1 のノートをテレビ画面に表示する。）
	C	C1 君。C1 君のノートだ。
	教師	ところがどっこい。ここで問題が発生する。これちょっとどういうことか。そのまま読んでもよいし、みんなに説明して。どういうこと？
	C1	最初は遊んでいるような楽しい気持ちで、でも山猫に襲われて気持ちが真反対に変わったと思う。
	教師	ストップ。ここまで伝わったよって言う人。
	C	（多数の児童が手を挙げる。）
	教師	え、どういうこと？
	C13	真反対っていうのは立場が逆転していて、紳士と動物の関係がなんか逆転しているということ。
	教師	立場が逆転しているということ？C1 さん、そういうこと？
	C1	うん。
	教師	もう少し詳しく説明して。
	C1	最初は遊ぶように楽しく動物を狩って…、狩ってはい

		ないけど、猫に襲われて紙くずのようになったってことは、悲しいという気持ちだから、こわいっていうか…。
	教師	ここは（板書の紳士を指さして）楽しんでいたんだよね。ところが、ここですごい。C2さんが言ってくれたところだ。真逆に、真反対に変わったよって言ってくれたんだね。
	教師	ちょっと待って。ここまで納得いく？C1さんの意見。C4さん納得いく？
10:00	C4	納得いかない。
	教師	いかないんだね。C4さん、どうして？
	C4	うーん、あのね、なんか…
	C4	（20秒の沈黙）
	C4	なんか納得できない。
	教師	まだ納得できないんだね。
	教師	真反対になっていること。納得できるよっていう人。
	C	6, 7人の児童が手を挙げる。
	教師	微妙っていう人もいるよ。まだちょっと分からない。
	C	（3～4人手を挙げる。）
	教師	C8さんどっち？真反対になっているのに納得いく？
	C8	納得いくよ。
	教師	納得いくんだね。OK。OK。そしたらその理由を、納得いくよっていう人でその理由を言ってくれる人いる？C2さんどうぞ。
	C2	C1君が言ってくれたやつで納得いく理由は、俺と同じことを書いていたし、俺と同じところに注目した。
	教師	何という言葉に注目したの？
	C2	紙くずのような顔。
	教師	そこだよ。
	教師	（C2のノートをテレビ画面に表示する。）
	教師	C2さんだったら絶対そう思うと思ったんだよね。C2さん、あなたが一番注目した言葉はどれ？
	C2	泣いて泣いて泣きました。
	C	（口々につぶやく）
	教師	あれ、みんな「泣いて」何個あったんだっけ？数えてみて。
	C	泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。（口々につぶやく）
	教師	これどんぐらい泣いたんだろうね。

	教師	ここからここに真反対になっていて、ここがC 2さんが着目した言葉で、これがキーワードになっているんだね。
	教師	ここでもう一人ご紹介します。
	C	C 3だ！C 3だよ。
	教師	ここでC 3が言っていることに納得いくかいかないか後で手を挙げてもらうよ。
	教師	(C 3のノートをテレビ画面に表示する。)
	教師	これね、ウルトラレベル高いからね。よく聞いて。
15:00	C 3	専門の鉄砲打ちは殺したくなくても殺している人。だから紳士たちはこれからそういうことをしてありがたみを感じて生きていく。
	教師	伝わったよっていう人いる？
	C	(多数の児童が手を挙げる。)
	教師	じゃあ、ちょっと待って、分解していくよ。この赤枠から行くよ。
	C 3	専門の鉄砲打ちは殺したくなくても殺している人。
	教師	ここまで伝わったよっていう人どれくらいいる？
	C	(多数の児童が手を挙げる。)
	教師	じゃあ、さっきまでわからなかったって言っていたC 5さんどういうこと？
	C 5	専門の鉄砲打ちは絶対に殺したいというわけではないけれど、あの一、任務で殺さないといけないから、悪いことをしているわけではない。
	教師	任務なんだ。
	教師	ここまでは良い？C 8さんもよい？
	C 8	先生、話してもいい？
	教師	いいよ。C 8さんどうぞ。
	C 8	あのさー、いつ何が起こるのか自分も運次第だから分からない。
	教師	これ、C 8さんが昨日言っていたことだよ。C 8さんは何が伝えたいの？
	C 8	その1日ごとの運で何が起こるか分からない。もし運が悪ければ、人が食われるか、事故に合うか。
	教師	運が悪いと人が殺されることもあるんだね。勿論殺すこともある。殺す一殺されるんだね。ここは。ちょっとよい？ここは殺す、殺される、それがいつ起こるか分からないよ。いつ起こるかそれが運の世界。
	教師	でみんな一個質問してよい？C 8さんがすごく大事なことを言ってくれたからさあ。みんなが普段生きてい

		る時ってさあ、人間が殺したり殺されたりする関係性で世界の中で食べたり食べられたりして生きている？
	C	(口々につぶやく。)
	教師	狩りはしていないよね。
	C 9	でも、魚とかは食べたりしているからさあ。
	教師	生き物の命は本当は食べているんだよね。
	C 9	でも…。
	教師	でも、C 9 さんどうぞ。
	C 9	自分が殺しているわけではないし…。
	教師	自分が普段殺している？
	C	ううん。殺してない。
	C13	売っているものを食べている。
	教師	ああ、売っているものを食べているよね。
20:00	C 9	自分が殺しているんじゃないくて…、まあ、食べているけど、食べないと人間は生きられないから、生きられないから食べている。
	教師	本当は生きられないから食べて生きているんだね。
	C 9	生き物以外のものもあるけど、生き物がいないと食べられない。
	教師	みんな食べて生きているよね。けど、みんな直接殺しているというよりは、売っているものを食べているんだね。
	C 1 1	給食だってそう。
	教師	給食だってそうだよ。
	C 1 3	お魚だって殺してない。
	教師	お魚も出ているけど、みんなは直接殺して食べることはあまりないよね。だからみんなはどちらかというとこちら（紳士や山猫の側）の世界で
	C 1	生きている。
	教師	生きているんだね。
	C7	悲しいね。感謝、感謝。
	教師	こっちだよ。赤で囲う方
	C 9	(何かをしゃべろうとしている。)
	教師	ちょっと待って、C9 さん。そのうえで C3 さん。下のところまでちょっと確認してほしい。
	C3	今度からは、紳士はこういうことをして生き物を殺すけど、やるんだったら任務とかで…。殺したものを大切にして痛みを持って生きていく。
	C7	いただいているわけだから。
	教師	C3 の言っていること、ここで納得いったよっていう

		人いる？
	C	(半数ぐらいの子どもが手を挙げる。)
	教師	反対に納得していない。
	C	C4 だけ手を挙げる。
	C7	生き物の命を売っていることに気づいてありがたみを持ったから。感謝というか生き物を殺すことのありがたみ。
	教師	生き物を殺すことのありがたみ？
	C7	植物だって生きているわけだから。
	C13	亡くなっているものがあって今があるから。
	C7	動物だって殺されたら泣くと思う。
	C1	だから「いただきます」とかを言わないとさあ、紳士みたいなことになるのかな。
	教師	こっちの紳士？
	C1	うん。俺らがご飯を食べる時とかに「いただきます」とか言わなければ、生き物は殺していないけれど、生き物に感謝していないから紳士と同じようなことになっちゃう。
	教師	こっち（紳士と山猫の方を指して）になっちゃうっていうこと？
	C1	うん。
	教師	普段は自分たちはこっちの方（「だいぶの山奥」）だよ。でも本来はみんなこっち（「山奥」）の方で生きているんだよね。
25:00	C7	月曜日に友達と 700m くらいの山に登って、塩山山から見下ろして、甲州市全部を見渡したら、この山は見守ってくれているんだなっていうのが、最後の紳士。だから山もなんか生きている。
	教師	山も生きているんだね。僕たちは普段こういうことを忘れているよね。そういう意味では山猫と紳士と一緒の世界なんだけど、でも本当はこっち（「山奥」）の世界で生きているんだよってことだよ。
	C4	納得いった。
	教師	C4 さん何が納得いったの？
	C4	理由はないけど。
	教師	理由はないけど納得がいったんだね。
	C13	自分は真ん中らへんかな。
	教師	真ん中だと思うんだね。
	C13	今で命を大切にしているというのは分かったと思うんだけど、山鳥を買って帰っているから…。

	教師	すごいことに気づいたね。みんな C13 さん何ページのことを言っている？
	C 6	最後だよ。
	教師	最後ちょっと見てみて。なんて書いてあるの？
	C4	途中で山鳥を十円だけ買って東京に帰りました。
	C	(口々につぶやく。)
	教師	え、この人結局山鳥を買って帰っているじゃん。
	C10	感謝感じているのかな。
	C	(口々につぶやく。)
	C 1	だけど…。
	教師	だけど、なんだよね。この人たち十円だけ買って帰っているから結局お金で生き物を買って帰っているよね。だから全然変わっていないんじゃないのって思うよね。
	C 6	結局お金で解決しようとしている。
	教師	そうだよ。お金だよ。でも、よく見てね。C 1 さん、注目した文章があるよね。
	C 8	あ、本当だ。買って帰ったって書いてある。十円も「も」と十円「だけ」
	教師	あれ？山鳥を十円「だけ」買って帰ったっていう文章と十円「も」買って帰ればいいのかっていう文章に注目しているね。この文章は最後に書いてあったよね。ちょっと探してみて。
	C	(十円も買って帰ればいいのかという文章探す)
	教師	書いてあることはだいたい同じだよ。けど、何かが違うところがあるぞ。
	C	(口々に話している。)
	教師	C12 さん、書いてある内容はだいたい違う？同じ？
30:00	C 1 2	違う。
	教師	ちょっと違うところもあるよね。どこが違うかな。一緒に読もう。
	C	(二つの文章を音読する。)
	C 7	なんかみくびっている。
	教師	どうしてそう感じるの？
	C 7	なんか言い方が違う。
	C	うん。違う。
	C 7	山鳥を買って帰りましたと山鳥を十円だけ買って帰ればいいのか。
	C 1 1	狩れなかったから？
	C 7	狩れなかったんだけど…。買って帰ればいいのかじゃない

		かだけど…。
	教師	買って帰ればいいじゃないかだけど…。
	C 1 3	多分ね。買って帰っていただきますっていうと思う。
	C	(口々に話す。)
	教師	C 1 さんは言葉に注目したんだよね。どの言葉に注目したの？
	C 1	十円「だけ」と十円「も」
	C	ああ。
	C	分かった。分かった。
	教師	十円「も」と十円「だけ」は何が違うか班の人と話し合ってごらん。
	C	(班のメンバーと話し合う。)
	教師	十円「も」と十円「だけ」の違い確認できたよっていう人。
	C	(半数ぐらいの児童が手を挙げる。)
	C 10	十円「も」は十円も払わなければいけないということ で…。
	教師	それだけたくさんっていうこと？
	C 7	それだけたくさん高いってこと。
	C 9	それだけお金のことしか考えていない。
	C 11	生き物を大切にする気持ちがない。
35:00	教師	こっち(十円「だけ」を指して)は何が違う？
	C 13	命は十円だけでよいのか。命は十円だけで買っていい のか。
	教師	だから命を十円だけで買って帰っても良いのかという 気持ちがあるってことだね。
	C 7	山猫にやられて初めて気づいた。
	C 8	あ、確かに。
	C 7	この金の世だけでいただいていいのかって。
	C 8	お金の世界だから全て買ってよいのかって。
	教師	この右側がお金の世界だったってことか。
	C 1	自分の飼っていた犬が二千何百円の損害だって言って お金で見えていた。
	教師	これ(犬を指して)、お金として見ていたんだよね。お 金で見えていたんだよね生き物を。
	C 3	そこから…。変わった？
	教師	変わった？変わっていない？犬は死んだはずだったよ ね。
	C 10	でも最後が…。
	C 3	返ってきたよ。

	教師	返って来たんだよね。なんでだろう。絶対に死んだはずだったんだよね。なんでこの世界で死んだはずなのに。
	C 7	お金として最初は見ていた。
	教師	最初は犬をお金として見ていたんだよね。
	C 8	ねえ先生。命って一つしかなくて、鳥だって一つしか命がないんだからお金で買わない方がいいんじゃない？
	C 7	命のありがたみを感じる世界に生きている。助けに来ている。
	C	(口々人話す。)
	T	生き物の命の方に来たんだね。お金で見ていたところから。
	C 9	命として見てほしい。
40:00	C 8	先生ちょっとよい？生き物も同じ命があるからさあ、だったらさあ、本当は人を打っているようなものじゃん？
	C 4	こうやってね。
	教師	本当はみんな生き物を殺して生きているんだよね。
	C 8	で、生きている命は同じだからさあ。
	教師	本当は同じなんだよね。本当はだよ。本当は殺し合っているんだね。でも、みんなが生きているのはどっちかという、こっちだよ。
	C	右。(「だいぶの山奥」)
	教師	赤の方だよ。みんなが生き物の命を直接に殺し合うことはほとんどないよね。
	C13	ありふんじゃうとか。
	C 7	動物にとっては
	教師	でも、どこか気づかないところでありを殺してしまうようなことが
	C	ある。
	教師	あるんだよね。
	C 1 1	動物を殺していることは人を殺しているのと同じだよ。
	C10	捕まるよ。
	教師	ね。本当に生き物を殺していたら捕まるよね。人間同士が殺しあったら捕まる世界がこっち(紳士や山猫を指して)だよ。
	教師	でも、C11さん、俺たちだって本当は生き物を殺して生きているんだね。

	C 11	本来はこっち（専門の鉄砲打ちを指して）
	教師	こっちの世界はそういう世界なんだってことか。
	教師	この紳士はさあ、先生の投げかけなんだけど、普通は紙くずみたいな顔になるってどう思う？
	C	（口々に話す。）
	教師	みんなが本当にお湯に入っても戻らなかったらどう思う？
	C	辛い。悲しいと思う。後悔していると思う。
	教師	でもみんなはこうやって後悔して生きている紳士ってよい？
	C 7	やったことを後悔しているなら…。
	C 4	やったことを後悔しているのはいいんだけど、笑って殺すのはダメだと思う。
	教師	笑って殺すこっち（紳士と山猫を指して）の紳士はダメだと思う？
	C 4	しわくちゃになったけど、でも生まれ変わったんじゃないと思う。だってただ顔がしわくちゃになって…。
	C	（授業の途中だが、スーパーの校外学習に行く3年生の見送りを教室から校庭に向かってする。）
	教師	スーパーオギノの買い物はどっちの世界かっていうと…。
	C	こっちこっち（笑）（紳士と山猫の世界を指して）
	教師	スーパーオギノはこっちだよ。けど本当の生き物の世界はこっちなんだな。（専門の鉄砲打ちや犬の世界を指して）
	C 4	けど、紳士は反省してないよ。
	C	なんで？
	C 4	けど、紳士の顔がしわしわになって泣いているだけだから別に反省していないと思う。
	教師	反省はしていないよって思うんだって。みんなどう？
	C	（口々に言う。）
	教師	ちょっと、今回みんなとどんなことを考えたかったかという、これ先生の最後考えを言って、みんながどう考えたかは明日みんなに最後感想を書いてもらうんだけど。先生の考えが正解とかではなくて、一人の人としてどう読んでいってことなんだけど。
	教師	紳士と山猫はどっちも生き物を楽しんで殺していたり、都会とかってみんな分かる？そういう東京の都会としての場所だなんて思うんだよね。
	教師	でも、泣いて泣いて泣いて泣いて泣いた紳士は、生き

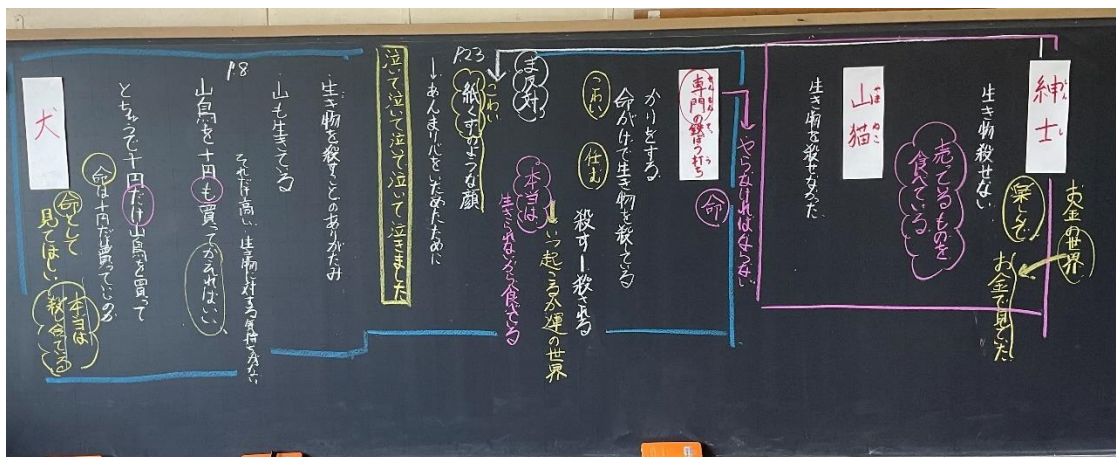
		物を殺したり殺されたりすることを心から感じたんだと思うんだよね。生き物を殺したり殺されたりすることを心から感じた紳士は今も紙くずのような顔で生きている。この紙くずのような顔のまま生きていくということが
	C	日常生活が大変そう。
45:00	教師	日常生活を生きていくのは大変だよね。この恐怖を持って生きている紳士たちは、こっちの青い世界の方（専門の鉄砲打ちの生きる世界）にいったんじゃないかなって思うんだ。

○第6時を終えての学習感想（原文ママ）

C 1	もは生き物の命を大切にしていけないようなこと。山猫のこわさで泣いて泣いて泣いて泣きいて泣きました・紙くずのような顔。そのぐらいこわかった。だけは十円だけの大切にしている命。ここに思っで見直したから犬がもどって来た。 紳士は山猫のわなにひっかかたけど自分だったらどこで気づくんだろう。料理店の戸には金や赤で文字がかいてあったのはきけんの色を表していたと思う。 宮沢さんがこの料理店を考えたのはとってもすごい。人物や店にふしぎな意味をかくしていたのはビックリした。宮沢さんは兵隊のような人だ。 紳士などの人物はぼく達の命みたいな人。動物がころされて自分達が食べると人のじゅみょうも長くなるけど動物が動物をたべて体が大きくなって紳士のような人が死んでしまうとぼく達の命のかけらがかけてしまうかもしれない。
C 2	P.22 はきゅうに、話しがかわっているとおもう。理由は、P 22 の3行目から「いや、わざわざご苦労です。から、さあさあおなかにおはいりください。」ですが、はなしがきゅうにかわったと思った。だから注文の多い料理店は1つの、本の中に、色々な話しがはいっているとおもう。 もう1こぎもん 何でさいしょに紳士たちは、イギリスの兵隊のかたちをして、山にあそびにいったのは、なぜ。だってもともとは、紳士がきっかけではじまった話なのに、さいごには、紳士は、山猫に、くわれてかわいそう、なのは、何んでだろうか。この話しは、山猫も、紳士もどっちも、すべてわるいわけじゃない、ってことになる。
C 3	せんもんのてっぼううちは殺したくなくても殺している人たち。紳士たちはこれからこの世界に生きていく。山猫は紳士にげんかくを見せた。紳士はそのげんかくを楽しんでいた。山猫たちもおもしろがっていた。でも、紳士たちはすごくこわがった。生き物の命のいたみを知って生きていく。だからげんかくは消えて新しい世界がやってきた。

C 4	ねこはしんしにころされてからうらみをもって人げんをころすうらみをもっただからもとわといえはしんしがわるいだってしんしが山猫をころさなきゅうらみなんてもってないとおもうかりにいくならまだしもわらいながらころされてでもねこがわらいながらたべたらわるいっていうんでしょなぜ人げんがやったらゆるされるのにどうぶつがやろうとしたらダメなのもとはといえはせんものてっぽううちとしんしがやったんでしょなぜねこがやったらおこられるのわたしはヒーローだとおもうよだってころした2人がわらったどうぶつだもうわたしはいまおこっているよ。 かりをしている人とあそびでころしている人がいる
-----	---

○第6時の板書



7.省察—「注文の多い料理店」の読みを問い続けて—

本授業実践の核心部分、それは【「すきとおったほんとうのたべもの」をめぐる生命の原理・原則を問う読みと「近代文明に対する内側からの批判」という枠組みで作品を理解していこうとする読みとのせめぎ合い】にあります。例えば、C 1、C 2、C 3は、〈語り手〉が語る「だいぶの山奥」と「山奥」という二つの空間を峻別して作品を読んでいます。C 1の場合、「泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました」の意味に立ち止まり、「十円も」と「十円だけ」の違いを問題化することで、食べる一食べられる関係性という生命の在り方を問うています。C 2は、視点人物が紳士であったところから急に山猫へと切り替わっていることを問題にしています。そうすることで、紳士と山猫を相対化するまなざしを持って作品世界を読むことに向かっています。これは、C 3が記している「げんかく」の世界を超えた「新しい世界」という問題と直接的に関わっていると言えるでしょう。C 2は紳士と山猫が作り出している共同幻想をメタレベルから相対化しようとしているのです。このように、子どもたちの感想文の中では、視点人物の紳士のまなざしを超えた〈語

り手〉のまなざしの問題が現れており、「だいぶの山奥」を超えた「山奥」をそれぞれのかたちで掘り起こしています。

一方、C4は、文明社会に生きる紳士を徹底的に批判することに向かっています。それは、山猫に自己を重ねるかたちで展開されていき、読後の感想文では「わたしはいまおこっているよ」という怒りとして表出しています。授業記録を見てもC4は授業の最後まで紳士の転換を受け入れていません。しかし、このC4の感想文はもう一方では出口を求めているようにも思われます。それは、「かりをしている人とあそびでころしている人がいる」という捉えが末尾に唐突に表われていることです。C4は、初読の感想文では「とちゅうでかおがしわくちゃになっちゃたのがなぜなのかギモン。いみがわからない。たべられるとおもいきやたべられなかった」と記述しています。ここでは、視点人物である紳士の中に入り込んで作品世界を捉えていることが分かります。そして、7時間の授業を経ることで、次第に山猫の側から紳士を批判するようになったのですが、その過激な批判は結果的に、視点人物としての紳士の暴力性を肯定する危険性と隣り合わせになっています。山猫と紳士は表裏一体の関係にあり、この枠組み＝「だいぶの山奥」を相対化して読むことをC4は内的に求めているからこそ、「かりをしている人とあそんでころしている人がいる」ということに立ち止まっていると推測できるのです。なお、C4はC7の「月曜日に友達と700mくらいの山に登って、塩山山から見下ろして、甲州市全部を見渡したら、この山は見守ってくれているんだってというのが、最後の紳士。だから山もなんか生きている。」という意見に対し、授業者が「山も生きているんだね。僕たちは普段こういうことを忘れているよね。そういう意味では山猫と紳士と一緒にの世界なんだけど、でも本当はこっち（「山奥」）の世界で生きているんだよってことだね。」と整理していることについては納得しています（授業記録25：00頃）。C4は紳士と山猫がどちらも貨幣経済の世界を生きしており、そこに抱え込まれている問題性については受け入れています。ただし、そのことを言語化することができず、貨幣経済の内側で紳士を批判することで立ち止まっています。

このような読後の感想文で問題となっている事態こそ、授業実践全体を覆っている課題です。すなわち、【「すきとおったほんとうのたべもの」をめぐる生命の原理・原則を問う読みと「近代文明に対する内側からの批判」という枠組みで作品を理解していこうとする読みとのせめぎ合い】です。C4の初読の感想に「いみがわからない」とあったように、子どもたちは視点人物の紳士のまなざしに拘束されるかたちで、この作品で起きている事態の「分からなさ」に立ち止まっています。そして、その「分からなさ」と正対する際、「だいぶの山奥」の枠組みの中で「近代文明に対する内側からの批判」を展開する方向性と、その「分からなさ」を賢治が序文で記した「すきとおったほんとうのたべもの」として受け止めていく方向性との間で葛藤が生じているのです。前者の「近代文明に対する内側からの批判」はリアリズムの枠組みの中にあります。そこでは紳士のまなざしの中で紳士と山猫の関係性（＝「だいぶの山奥」）が問題にされていきます。一方、後者の「すきとおったほんとうのたべもの」は、リアリズムを超えた〈外部〉（＝「山奥」）が問題になります。ここでは〈語り手〉のまなざしによって視点人物の紳士のまなざしが相対化されていきます。この二つの世界観認識の葛藤を如何に乗り越えるかということが、一人一人の子ども、そして授業者の中で問われていました。視点人物の紳士のまなざしを超えて〈語

り手〉のまなざしを問題化し、リアリズムを超えた「すきとおったほんとうのたべもの」を探求し続ける営みが授業実践の中で問われていたのです。作品研究においてリアリズムを超えた〈外部〉を問題にするという世界観認識は、授業実践においても通底するものであったことがここで見えてきます。「注文の多い料理店」の読み、そして賢治が序文で問題にしていた世界観認識とは、文学研究・国語教育研究の双方を貫くものとして今、ここに現れてくるのです。

こうした事態を踏まえ、「すきとおったほんとうのたべもの」の領域をさらに授業実践の中で追究していくための方途を最後に記述します。第6時の末尾、授業者は自己の読みを述べました。その際、まず「紳士と士と山猫はどちらも生き物を楽しんで殺していたり、都会とってみんな分かる？そういう東京の都会としての場所だなんて思うんだよね」と読みを提起しています。しかし、ここで課題となるのは「生き物を楽しんで殺していた」ことを「だいぶの山奥」の問題性として整理している点です。ここで読みを根源的に突き詰めるならば、単に紳士が生き物を楽しんで殺していることに対する指摘としてではなく、むしろ生と死の交換のやり取りの場が消去されている貨幣経済の枠組みの問題性として子どもたちに提示していく必要があったと考えます。授業者は、C4が「楽しみながら殺している紳士への反感」を提起していたことに応答しようとする意識がありました。ところが、その授業者の応答が、かえって視点人物のまなざしの側に授業を回収し、「だいぶの山奥」の根源的な課題が見えにくくなってしまっています。C4は山猫の暴力性を肯定するかたちで紳士を批判しています。しかし、そのことがC4の言動や記述に山猫的な過激さを齎しています。このC4のまなざしに授業者が回収されるのではなく、〈語り手〉のまなざしの方に向かう指差しが必要だったと考えます。つまり、楽しんで殺しているという紳士の意識レベルの問題を批判することに留まらず、紳士と山猫の無意識レベル＝生と死のやりとりの場の消去という貨幣経済の根源的な問題を授業の中で問うていくことが求められていたのです。このようにして「だいぶの山奥」の問題を整理していたならば、紳士が「泣いて泣いて泣いて泣いて泣」いたことの意味もまた授業の中でより一層深く問題にすることができたと考えます。紳士たちが食べられる側の立場に立つことで生命の原理・原則をその身で体感した、これが「泣いて泣いて泣いて泣いて泣」いたことの根幹です。単に命を粗末にしていた紳士が痛い目を見たという次元で読みが問題にされるのではなく、貨幣経済全体の問題として紳士の在り方を相対化していくことでC4の読みは切り拓かれていったと思われます。さらに、このことはC4に対する応答になるのみならず、他の子どもたちの読みの深まりにも波及していきます。例えばC3は授業の中で「今度からは、紳士はこういうことをして生き物を殺すけど、やるんだったら任務とかで…。殺したものを大切に持って生きていく」と発言しています。このC3の気づきは、紳士の内面の変化として問題にされていると言えます。しかし、「だいぶの山奥」を超えた「山奥」における生命の原理・原則の問題をC4に対応するかたちでより明確に問うことができれば、C3は「紙くずの顔」の紳士たちが山奥の生の循環と呼応していることを発見することになるでしょう。紳士の「紙くずの顔」を「反省」や「罰」といった共同体において理解可能な範囲で囲い込むのではなく、生命の原理・原則が問われるように読みが拓かれていくのです。このような読みの実践を展開することで、「すきとおったほんとうのたべもの」はリアリズムの枠組みを超えて、教室で問われ続けていくと考えます。

8. 終わりに

賢治は、「大自然」から聞いた「ものがたり」が「あなた」の「すきとおったほんとうのたべもの」になること求めています。文学研究・国語教育研究は、この「わたくし」からリスナーに問いかける問題を受け止め、パラダイムを転換していくことが求められています。そのためには、〈言語以前〉＝〈第三項〉＝〈外部〉という世界観認識を必要としています。そして、「注文の多い料理店」の読みでは、視点人物のまなざしを超えた〈語り手〉のまなざしを問うことが要請されています。リアリズムを踏まえつつ、その〈外部〉の「すきとおったほんとうのたべもの」という審級を問うこと、このことが読みの実践を新たなに切り拓いていくのです。

引用文献

- (1)序文及び「注文の多い料理店」の本文は、基本的に、宮沢賢治『注文の多い料理店』（1990年 新潮社）を参照している。ただし、授業実践の際には『注文の多い料理店―宮沢賢治童話集1（新装版）』（2008年 講談社）を用いている。
- (2)三島由紀夫「小説とは何か」（1972年 新潮社）
- (3)田中実「芥川龍之介の自殺と童話『白』―近代小説の〈本流〉と《神髓》」 未発表
- (4)注(3)に同じ。
- (5)田中実「『読むこと』の原理と『良き小説』の絶対的な基準」（田中実他『21世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校編』2023年 明治図書）
- (6)注(5)に同じ。
- (7)恩田逸夫「宮沢賢治『雪渡り』と『注文の多い料理店』」（『宮沢賢治論3 童話研究 他』1981年 東京書籍）
- (8)秋枝美保「童話『注文の多い料理店』論―「都会」というシステムに「どこでもドア」を開く」『宮沢賢治を読む―童話と詩と書簡とメモと―』2014年 朝文社）
- (9)西郷竹彦『宮沢賢治「二相ゆらぎ」の世界』（2009年 黎明書房）
- (10)大森荘蔵「言語と世界」『思考と論理』（1986年 ちくま学芸文庫）
- (11)田中実「背理の輝き・『注文の多い料理店』論」（田中実他『21世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』2023年 明治図書）